

令和元年度ホームステイ派遣事業を終えて

大村市福祉総務課職員

随行員 まるやま みゆう 丸山 弥由

1 はじめに

初めてのヨーロッパ、このような形で訪問することになるとは夢にも思いませんでした。今回の随行は、学生時代のホームステイ経験を活かし、学生たちの立場でサポートができればとの思いで手を挙げました。しかしそれも昔のこと、無事に随行員としての責務を果たせるのだろうか、と大きな不安とプレッシャーに押しつぶされそうでした。

出発前、以前随行に参加した方々の話を聞きました。それぞれに異なる経験をされており、それぞれの思いをお持ちでした。私は、学生が思い切り楽しめる雰囲気を作りたいと思い、この2週間で自分なりに楽しもうと決心しました。

今回シントラへ派遣された学生は中学3年生から高校2年生の4名。くしくも天正遣欧少年使節団と同じ人数です。彼らは、家族と離れ異国の地でどのような体験をし、何を感じるのでしょうか。彼らの希望に満ちた目に、私もワクワクしながら長崎を後にしました。



2 シントラ市での生活及び視察

羽田から約13時間のフライトでパリに到着し、さらに乗り継ぎ2時間半。リスボン空港へ到着し、到着ロビーへ向かうと手作りのウエルカムボードを掲げたシントラ市の職員とホストファミリーたちを発見。彼らは大歓迎で私たちを出迎えてくださりました。



私たちがともに行動するのは基本的に平日のみです。到着は金曜だったため、いきなりの週末。到着翌日の午前中はユーラシア大陸最西端であるロカ岬を訪れた際に合流したものの、それ以外はホストファミリーと思い思いの時間を過ごしました。

週が明け、本格的に視察スタート。平日はシントラ市が組んだスケジュールに従い視察を行いました。シントラ王宮を始め、ムーアの城塞、モンセラテ宮殿、レガレイラ宮殿、ケルス宮殿などの史跡を巡りました。可愛いトラム(路面電車)で訪れたビーチには、日本では見ることのできない大西洋が広がっていました。延々と続く海岸線に打ち寄せられる波は、とてつもなく壮大でした。リスボンまで足を伸ばしてジェロニモス修道院や市内の散策なども行いました。ペーナ宮殿で

はストライキの影響を受けたものの、それもまたいい思い出です。

この時期ほとんど雨は降らないと聞いていたのですが、今年は夏でも気温が低く、雨が多いとのこと。確かに滞在中は少々肌寒く、曇天やにわか雨の日が多かったものの、日本のような湿気もなく、非常に過ごしやすい気候だと感じました。

普段の生活でもポルトガルの文化を深く感じる場面があり、宮殿などでよく見られる「アズレージョ」と呼ばれるタイル細工は、普通の家や駅など街の至るところに施されていました。また、スーパーマーケットなど現地の人々の生活が垣間見える場所は日本との違いを肌で感じられるため非常に興味深く、その気持ちは学生たちも同じだったようです。



4 交流

お互い母国語ではない英語でコミュニケーションを取ることは容易ではありません。派遣学生に関しては、ステイ先に戻ると日本語が一切使えない上にポルトガル語が飛び交う、という不安やストレスもあったでしょう。初めの頃は同じ国の学生同士で話したり、それぞれがスマホで SNS を見たりゲームをしたり…という時間も少なからずあり、口を出すべきか悩む場面もありましたが、流行の歌・アニメの話題やゲームなどで少しずつ会話を弾ませ、親密さは増していきました。そのうち待ち時間などがあると「みんなで」遊ぶようになり、学生たちが移動の車内や公園ではしゃぐ光景を見て、思わずこちらが嬉しくなったものです。

空港での別れのときはみんなで号泣(私も含め)。それだけ濃密で楽しい時間だったのだと実感しました。しかし、これは最後の別れではなく始まりです。彼らは、いつでもどんなに離れていてもすぐに繋がれる SNS という強い武器を使い、これからも連絡を取り合い、来年再会する頃にはより親密になっているでしょう。



5 終わりに

振り返るとあっという間の2週間でした。滞在中は大きなトラブルもなく、無事に4人を連れて帰国することができたことにひと安心です。頼りない随行員だったかもしれませんが、忘れがたい貴重な経験をすることができました。

視察の時間外にも、シントラ市の担当職員2名には大変お世話になりました。彼女たちは交互にさまざまな場所へ連れて行ってくださったり、おいしい食事をご馳走してくださったり、いろんな話をしたり…私自身も素晴らしい時間を過ごすことができ、ポルトガルに友人ができたようで感慨深いです。人との縁は、思わぬところで繋がるもの。今回の派遣に参加しなければ決して出会わなかっただろう人々との縁を、できる限り大切にしたいと思うし、学生たちにもそうしてほしいと願います。

自然豊かなシントラは山があり、海があり、猫が多く、坂が多く、トラムもあります。どことなく長崎を彷彿とさせる風景は、異国の地でありながらどこかほっとする雰囲気でした。知っているようであまり知らないこの美しい街と姉妹都市であることに誇りを持ち、その魅力をもっと発信したいと感じましたし、長崎・大村の魅力を再発見するきっかけにもなりました。

最後に、担当業務が繁忙期であるにもかかわらず今回の派遣事業参加を後押しし、快く送り出してくださった福祉総務課の皆様、現地との連絡調整や事前研修などフォローをしてくださった企画政策課・国際交流プラザの皆様、そして担当であるフィリパ氏・エルサ氏をはじめ、私たちを受け入れてくださったシントラ市およびホストファミリーの皆様、ほか本事業に係るすべての方々へ感謝申し上げます。本当にありがとうございました。